

金融広報アドバイザーの紹介

若いころから正しい知識を身につけることが必要

野澤通

(茨城県)

身近なものにたとえると興味がわいてくる

「金融教育の第一歩は、とにかく金融に興味を持ってもらうことです」
こう語るのは、茨城県下で金融広報アドバイザーとして精力的に活動している野澤通さんです。FPとして、また日本ファイナンシャルプランナーズ協会茨城支部長としての仕事も同時にこなしながら、子どもや学生、主婦などに講演や金融教育を行っています。

金融広報アドバイザーとしての活動を始めた当初、子どもたちの金融への無関心さに驚いたという野澤さん。そこで金融広報中央委員会が平成17年度に実施した「子どものからしとお金に関する調査」の結果から、とくに誤解の多い分野に力を入れることにしました。

「この調査のなかに、たとえば『契約は全て書類に記名し、印を押すことで成り立つ』という設問があります。正解は×。口頭での契約も原

則として有効なのですが、この設問の正答率は高校生でもわずか22.4%に過ぎませんでした。契約は、今後彼らの人生のあらゆる場面で必要になってくる大切なことです。そこで私は、学生の大半が持っている携帯電話を例にして契約の概念を説明しています。身近なものにたとえることで、より興味を持ってもらえると思うからです」。また、簡単な複利計算が必要な設問に対しても、77.4%の高校生が誤った解答をしているとのこと。「つまり、複利の概念を知らない若者が多いということですね。マネープランを考えるにあたっては、複利と単利では長い年月で比べると大きな違いが出てきますので、これもぜひ知っておいてもらいたいことですね」

若い世代への金融教育をもっと充実させたい

野澤さんは大学卒業後、住宅メーカーに入社。住宅分譲部門などに

16年間勤めました。その間に得た知識を活かし、99年に同社を退職してからは不動産や相続問題に強いファイナンシャルプランナーとして活躍しています。金融アドバイザーとしての活動では、まず金融に興味を持つてもらえることを目標にしています。たとえば主婦や年配の方には、土地建物とその相続についての話を自らのノウハウをおりませず話して、学生にはパソコンを使って知るほるとホームページの「生活設計診断」シミュレーションをやってみてもらいゲーム感覚で知識をつけていくなど、受講者によって話す内容を変えているのもその一環です。

「金融知識は、必要なものですが最初は馴染みにくいため、まずは興味を持つきっかけになるようなプログラムを模索しています。ちなみに自分の娘には、一緒に人生ゲームをやりながら将

来のリスクを教えていますよ」
お金が全てというわけではありませんが、お金の問題は避けて通れないのもまた事実。お金と上手につきあひ使っていくための知識を、今以上に若い世代に教えていきたいと話す野澤さんは、単なる金融知識ではなくその後の行動に活かしてもらえることを願いながら、日々の活動に取り組んでいます。



金融広報アドバイザーとは、金融広報委員会からの委嘱を受け、各地において暮らしに身近な金融経済等に関する勉強会の講師を務めたり、生活設計や金融・金銭教育の指導等を行う金融広報活動の第一線指導者です。現在、全国に約480名います。



年金への関心をきっかけに より自立した生活を

鈴江一恵
(香川県)

知識や情報の提供よりも
「気づき」を大切に

ファイナンシャルプランナーや社会保険労務士、キャリアコンサルタントに確定拠出年金プランナーなど様々な資格を持ち、幅広く金融の世界

で活躍している鈴江一恵さん。平均して年10回ほど香川県金融広報委員会が開催するセミナーの講師を担当しています。

セミナーを通して鈴江さんが訴えているのは、より自立した生活。

そのために生活設計に役立つ内容を心がけているとのこと。「セミナーでよくお話しするのは年金や医療保険についてですが、たとえば、みなさんに年金の手続きなどはどうしているかとお尋ねすると人まかせになつていらっしゃる方がけっこう多いんです。」「そこで自ら役所に足を運んで調べた結果、必要な届け出をしたことにより受け取る年金額が増えた例や、もらい忘れの年金が発見できた例などをとお話すると受講者

のみなさんの表情が変わっていくのがわかります」

鈴江さんがウエイトを置いているのは「気づき」。単に知識や情報を提供するだけでなく、自立して生活設計をしていく大切さをどのようにして気づかせるか。セミナーではそこに重点が置かれています。

気づくことは意識が変わること。そのお手伝いをしていくことに金融広報アドバイザーとしてのやりがいを感じる。と鈴江さんは話します。「私はよくセミナーで『変わらない生活をしていくためには、自分が変わらなければならぬ』と訴えています。確定拠出年金の普及など、年金も自分の責任で運用していかなければならぬ時代へと変わつていきます。そういった中で変わらない安定した生活を維持していくためには、金融に関する意識も変えていくべきだと思ふんです」

■世界の経済の話題も香川県に置き換えて説明

そんな鈴江さんがセミナーで工夫しているのは、わかりやすさとイメージしやすさ。「金融経済の話題も、そのまま説明してもわかりにくい場合があります。そういったときによく使うのが香川県に置き換える

こと。日本の縮図であるとも言える香川県は、金融経済のお話をする上では、素晴らしい題材なんです」

鈴江さんによれば世界経済と日本との関係も香川県と他県とに置き換えれば実感しやすくなると言います。

「香川県は、日本と同じく県内に資源が多くない地域。それに、香川県は、個人預貯金高が全国でも上位ということもあつて、日本国民の堅実性が表れているといったことなどをとお話すると興味を持ってもらえます」

生活設計や個人の自立にとって金融教育の必要性を感じ、毎回、講演を工夫している鈴江さん。これまでに、年金の話のみならず、大学生にもケース教材を使って討議を取り入れるなど、将来の生活がイメージできるように取り組んできました。そして、今後は、30歳や40歳代の人たちのより多くの参加を期待しているとのこと。「30代から40代はもっとも生活設計が大事な時期。働き盛りで社会の中核を担っている世代が年金などに積極的になることで社会全体にもいい影響を与えていけると思います。そういった人たちがもっとセミナーに参加していただけたら」とを願っています」